

加賀友禅 ニュースレター

Kaga-Yuzen Newsletter Vol.1



創刊にあたり

加賀友禅技術振興研究所
所長 藤村 盛造

加賀友禅技術振興研究所が発足いたしました。この発端は、加賀友禅技術振興研究所設立準備委員会が市の発案で2008年に各界の実践者メンバーを集めて、現状のヒアリングや意見交換会が6回ほど活発になされたことにあります。その時の座長役を私がファッション産業創造機構長の立場として任されたのがきっかけで、加賀友禅伝統産業会館の中に加賀友禅技術振興研究所が今回設置されることになり、図らずもその所長も兼務することとなりました。決して私がふさわしい役割ではないと思っておりますが友禅業界の状況を議論した後では所長が誰かではなく、研究所が発足が先決で業界や協会の活性化のために、現在の経済状況では猶予はなく、関係者を含めた議論が活発になされる場を設け、異分野を含めての情報交換から革新していく土俵が必要です。

近年、お正月でさえ着物もすっかり我が家では、着ることもない生活では、加賀友禅のことなど深くは知りません。ただ伝統工芸としてみた場合、産業化する課題は他の伝統工芸と同じで、そのままにしておくのと衰退していくのは明らかです。今日のライフスタイルでは伝統工芸品が生活の中に息づいて、盛んに使われていた時代と比べるとそれは明らかだからです。

加賀友禅は着物です。着物が日常から離れた特別なものになってきていることも事実です。友禅作家や、着物商の方たちでさえ普段は、背広で仕事をしたり、車を運転したりし

て洋装で訪問しているのが今日のライフスタイルです。原点に帰って、「着物」から「着るもの」に範囲を広げて加賀友禅を支えてきた技術を発展させることも必要ではないかと考えています。

伝統工芸を「護る事」から「発展させていく事」に私たちは心がけねば未来はないと思っています。

伝承する技術は、掛け替えのない金沢の資産であり、それを応用し新しく生み出す創造力も金沢には必要です。金沢で産みだす伝統工芸が生活に息づいて、はじめて日常のものとして発展し、新しいデザインも技術も創造されて、活性化してくるからです。課題は山積みです。

研究所では、業界の責任ある立場の方やご専門の方を含めた、運営委員会が組織され、現在4つのワーキンググループが課題に取り組む手はずになっています。そしてこのことは伝統工芸に携わっている一人一人が自らの課題として、その責務があると認識していただきたいと願っています。現在、加賀友禅業界の総売り上げは年間40億円前後と聞いています。ひとりの4分の1になっていますが5年後に100億になるように、その目標で頑張ろうと取り組んでいます。

私たちはその進路をまとめて、皆様に伝えていく交流センターであり、時代を背負う金沢の加賀友禅技術を、世界創造工芸都市・金沢のブランドとして未来へ向けて発展させていくことに研究所はお役に立ちたいと願っています。

加賀友禅ニュースレター Vol.1
2009.11.15
発行:加賀友禅技術振興研究所
〒920-0932 金沢市小將町8番8号
加賀友禅伝統産業会館2階
Tel.076-265-1040
Fax.076-265-1041
E-mail:yuzen@salsa.ocn.ne.jp
開所時間/9:00~17:00
休業日
毎週水・日曜日・祝日および年末年始



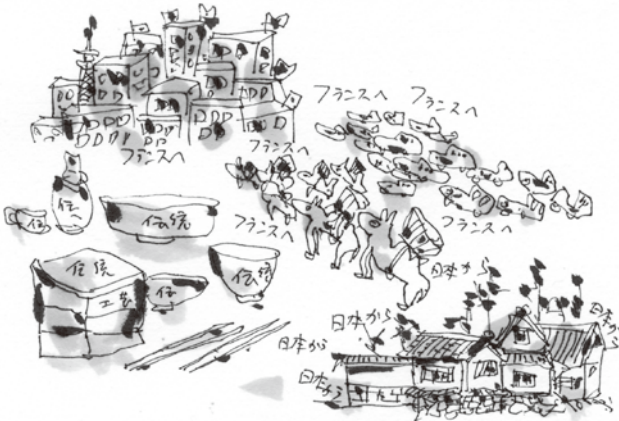
ワーキンググループ「工芸インテリア探求」分野の会議

話題の クリップボード

工芸の美をパリから発信

金沢のまちには、多彩な伝統工芸や生活文化が歴史を経て生き続けている。こうした土壤が認められ、金沢市は現在、ユネスコの「創造都市ネットワーク」にクラフト分野で登録されている。

今秋9月、山出保金沢市長はパリ市役所やパリ日本文化会館を訪れ、工芸交流を機軸にした今後の連携協力を依頼。加賀友禅や金箔工芸品などの魅力を伝えるとともに、両市の工芸職人による創作活動に大きな期待と励みをもたらした。



加賀友禅作家の落款とは

加賀友禅には、その絵柄を描いた作家の落款が染め抜かれている。これは協同組合加賀染振興協会の登録作家のもとで7年以上修業した後、師と協会員の間屋推薦を得て、理事会にて承認された作家のみが登録できる。

加賀友禅の特徴をなす美しいボカシ技法の絵模様や、特有の虫喰いで彩られる作品は、まさに優れた感性と多くの手間から成り立っている。いわば落款は作家の手仕事を証明して信頼を高めるとともに、商品としての質の高さを明示する大切な役割を担っている。



優美にミス加賀友禅コンテスト

今秋10月、金沢城公園の古雅を借景にした「おしゃれメッセ2009」会場で、あでやかに浮び上がった21人の晴れ着姿。ミス加賀友禅コンテスト一次審査の厳しい門を通過し、まばゆいライトを浴びて立ち姿や歩き方の美しさを競う緊張のステージが、ゆっくりと繰り広げられた。

一人一人が応募した動機や着物にまつわる話でアピールし、熱心に聞き入る審査員席と客席。そしていよいよ第6代目ミスとして田中友華さんと波並佳江さんの名が発表されると、会場全体が祝福の拍手に包まれた。2人には新作加賀友禅の訪問着が贈られ、加賀友禅親善大使として活躍するこれからの輝かしい1年間が待っている。



ミス加賀友禅コンテスト風景

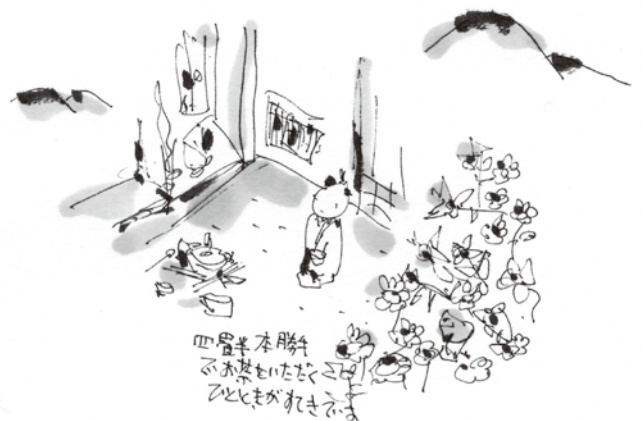
着物で楽しみたい金沢の茶室

歴史都市としての金沢には、情緒にあふれた茶屋街や町家空間、文化財建造物など見どころが数多い。中でも市内には、モダンな金沢21世紀美術館の敷地内に立礼席もある松涛庵や4.5畳本勝手の山宇亭、金沢職人大学校研修生も活用する長町の匠心庵など、金沢市が運営する11の茶室をはじめ、県運営の名勝兼六園内の時雨亭や石川県立美術館広坂別館などがあり、あらかじめ申し込めば仲間との気楽な茶会や句会などにも利用できる。

四季の金沢を加賀友禅とお茶のところで味わう趣向は格別のおすすめ。

詳細は、金沢茶室総合案内まで。

http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11020/chashi_tsu/index.jsp



アトリエ探訪 美の交差点

鶴見家は、保次さんの祖父他吉郎が加賀藩御用染物業であった太郎田屋の伝統を引き継ぎ、現業にある。保次さんが加賀友禪の模様師を志すのは、兄の友人だった日本画家の下村正一氏に絵を学ぶことがきっかけとなった。当時、加賀友禪の世界では木村雨山が斬新な感性を發揮し、それまでの規範的な着物図柄に日本画要素を加えた新しい作風を確立させていった。保次さんは「金沢の強みは、技の一から修業した作家層の厚みが基礎にあることやね」と話す。加賀友禪と対比される京友禪の世界では、新しい技術を取り込んだ職人が常に前面で切磋琢磨し、結果的に底流をなす伝統部分までが様変わりしてしまう。厳しい時代にありながら、加賀友禪がある種の品性を一律に保っていられることが、その意味では大きな強みともいえる。父とは30年のハンディがあると笑う晋史さんだが、あえて鎌倉で東京友禪スタイルの修業を父がさせてくれたことに深い思いが感じられるという。「いつも好かれるものをつくる」ことに対して、ようやく明確に見えるものがあるという。「じゃまにならない個性の先に、自然の草花が悠然と並ぶようなことかな」と話す晋史さんの顔を、保次さんはちらりと見た。



「秋草文様」鶴見保次



「最上川と桜と光」鶴見晋史

父子想

加賀友禪作家
鶴見 保次
(つるみ やすじ)
鶴見 晋史
(つるみくにちか)

株式会社鶴見染師工芸
金沢市東力4-71
Tel.076-291-1628
Fax.076-291-1699

【プロフィール】

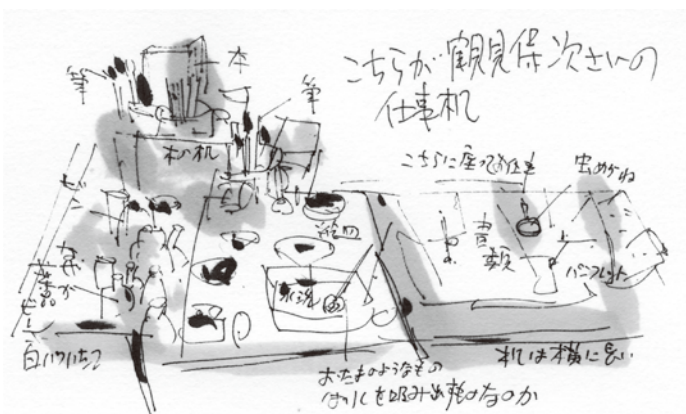
●鶴見保次

1939年 金沢市生まれ。
1957年 日本画家の下村正一に師事。
1976年 金沢市工芸展に工芸染色初入選。石川県現代美術展に工芸染色初入選。
1978年 日本現代工芸美術展に初入選。
1979年 第11回日展に初入選。
1986年 日本現代工芸美術展 工芸賞。
1995年 金沢市工芸展 審査員推挙。
1996年 第28回日展「古代の幻想」特選。
1997年 石川県現代工芸美術展最高賞。第29回日展 無審査出品。
1998年 石川県美術文化協会会員推挙。第30回日展「悠久」特選。
2001年 第33回日展 審査委員出品。
2002年 日展会員。
現在：加賀友禪伝統工芸士、日展会員、日本現代工芸美術家協会評議員、石川県美術文化協会常任評議員、金沢市工芸協会参与、加賀染振興協会理事ほか

●鶴見晋史

1969年 金沢市生まれ。鶴見保次長男。
1993年 九州産業大学芸術学部美術学部卒業。鎌倉にて日本工芸会正会員坂井教人に師事。
1996年 金沢で父の鶴見保次に師事。
2001年 ドイツ・イギリス派遣留学で工芸・絵画を学ぶ。
2006年 日展工芸部門に初入選。

常に明確な職人氣質があれば、新しい意匠力が生まれる。



着物の似合う

まちあんない

玉泉園

Gyokusen-en

財団法人 西田家庭園保存会



開園時間 9:00~16:00
 定 休 水曜日(祝日の場合は木曜日)
 入 園 料 大人500円
 お抹茶 干菓子付500円
 生菓子付700円
 ※お点前付は各300円U P
 ※12月初旬~2月末日まで休園

〒920-0932 金沢市小將町8-3 / TEL.076-221-0181
 URL : <http://www.gyokusen-en.com>

池をめぐって風の色を感じつつ一服のお茶
 名勝兼六園に向かい合う閑静な一角に、350年余の歴史をたたえる玉泉園がある。

門をくぐり、西庭の飛び石伝いに進むと、ミズバショウの咲く池端から登り道。岩間の水流と木立の深い緑を楽しみつつ、右手の高台には金沢最古の茶室「灑雪亭」と露地。左手の樹間に本庭の光景を見つつ道を下れば、東庭の清浄な風。中門をくぐれば池を一望する母屋の座敷と、隣接する寒雲亭写しの茶室が出迎えてくれる。

玉泉園の作庭は、初代の脇田直賢から4代へと約100年をかけたもので、庭の名は加賀藩2代藩主前田利長の令室玉泉院の恩顧に因むという。総面積は約720坪で、水源は兼六園。玉潤様式の庭は日本有数の妙を秘め、園内の数多い灯籠も見どころ。風雅な着物に和らぎつつ、めぐる池泉に四季折々の自然を楽しみたい。

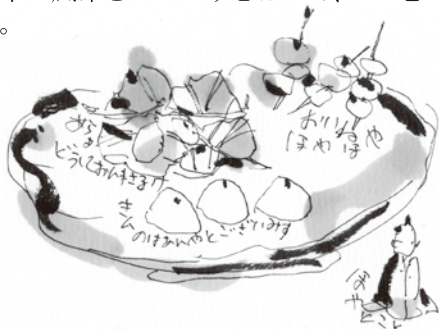


ちよと加賀屋流

金沢弁は上新粉

粋な言葉に魅せられて通ったのが寄席であった。漫才であれ落語であれ、聞いて小気味良いテンポと歯切れの良さでは、やはり江戸言葉が愉快であった。しかし一方では関西なまりの、まるでネジリアメのような話しぶりにも色艶がたっぷりと感じられる。商いのまちと言われた土地ならではの上方言葉に、人と人との心地よい距離が見える。では金沢弁とは様々な情景に思いをはせてみると、これが上新粉にも匹敵するおもしろさである。「おいね、ほやほや、ほやとこと」などは、そっけない新粉団子。「あらあどしておんまさがけ、たっしゃならいいがやけどね」なれば、柏餅のような湿り気に食指がそそられる。「きんのはあんやとございみす、なんもきづかいせんと、またいつでもおいでまっしね」の柔らかきなれば、上用粉の口当たり美味なる薯蕷饅頭とも言える。多彩なうち米の風味をたっぷり忍ばせて、この地の饒舌ぶりも随分楽しい。

(坂本善昭)



催事スケジュール

第45回 青花会「創作展」

日時:平成21年11月14日(土)~21日(土)
 9:00~17:00
 会場:加賀友禅伝統産業会館3階
 TEL 076-224-5511
 主催:青花会
 加賀友禅作家に師事する
 青花会会員が、年に1度、若者らしい
 自由な発想で作品を発表。
 入場無料